

山形昭の体育科（第2学年）研究計画

1 本研究の位置付け

運動する子どもとそうでない子どもの運動時間や運動意欲の二極化、体力の低下傾向が依然深刻になっている。将来の体力向上につなげていくために、すべての運動領域への素地となる体づくり運動の「多様な動きをつくる運動遊び」は、非常に重要な領域である。そのため、教師は運動遊びをとおして体の基本的な動きを総合的に身に付けることをねらいとして指導してきた。しかし、実際は、動きを身に付けられない子どもも見られた。

その原因は、限られた体育授業時数の中で効率よく動きを身に付けさせるために、教師が示範したり子どものよい動きを観察させたりして、「動きのコツ（動きを身に付けるために適した体の部位の動かし方）」を押さえさせてきたからである。夢中で運動遊びをしている子どもは、自分がどのように動いているのかというイメージをもっていない。そのような子どもに、教師が動きのコツを与えても、自分の課題と動きのコツとをつなげて考え、自分の動きに生かすことはできない。さらに、動きを身に付けられない子どもの要因は多様にあるにもかかわらず、教師や子どもから特定の動きのコツを示しても、それが必ずしも動きを身に付けられない子どもの要因を解決するとは限らない。このことは、示範は教師個人の考えを押し付けるという懸念が報告されていることから伺える。動きを身に付けさせるためには、自分の動きをイメージさせうたえで、子どもに複数の動きのコツを示し、自分の課題に合った動きのコツに気付かせることこそが大切である。

そこで、私は、「自分の課題を自覚させること」と「自分の課題とコツとをつなぐこと」に焦点を当てる。動きを身に付けられない子どもが、自分の課題と友達の見つけた動きのコツとをつなげ、**自分の課題を解決するための動きのコツが分かり、よりよい動きを身に付けることができる子ども**を目指す。

具体的には、まず、自分の課題を自覚させるために「動きのカルテ」を記述させる。動きのカルテとは、自分の体や用具の動かし方などを見直すための学習カードのことである。動きのカルテに提示された体や用具の動かし方を試すことにより、自分の体や用具の動かし方に着目させる。

次に、動きのカルテを書いて気付いたことを発表させることで、様々な動きのコツを共有する。すると、よりよい動きを身に付けられず困っている子どもは、自分の動きと動きのコツを比較し、自分の課題に気付く。さらに、様々な動きのコツの中から自分の課題に合った動きのコツを選択し、そのコツを試してみる。試してみて、そのコツを評価する。自分の課題と自分の課題に合った動きのコツとを関係付け、自分の課題を解決するための見通しをもつ。これが学びをつなぐ場面である。

最後に、自分が動きを身に付けるための過程を認知させる。自分の課題を解決するための動きのコツを見いだして動きを身に付けた子どもは、今後の運動課題においても、自分の課題とその運動における動きのコツとを関係付けて考えることができるようになる。それが、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を養うことにつながるのである。

2 主張する働き掛け

子どもが興味を引くようなストーリーを設定し、「動きを確認しながら運動する時間」として子どもに教師が身に付けさせたい動きを行わせる。このときの子どもは、動きを身に付けたいと夢中で運動に取り組んでいるため、どうやったら乗れるようになるのかななどと意識していない。そのような子どもに、タイムや距離などを視点として、評価を伝える。自分の評価を知った子どもは、「もっとうまくできるようになりたい」と考える。このように、意欲を高めている状態を問いをもった姿とする。

問いをもった子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

動きのカルテを提示し、どうしたらもっとうまくできるようになるのかを問う。

「もっとうまくできるようになりたい」と考えてはいるが、具体的な改善策が見いだせない子どもに、「どうしたらもっとうまくできるようになるかな」と問い、右記のような動きのカルテを記述させる。動きのポイントである体や用具の動かし方を、観点として示しておき、その他の体の動かし方について気付いたことは「そのほかのこつ」に記述させる。すると子どもは、動きのカルテに示された体や用具の動かし方を運動しながら確かめていく。例えば、「腕を閉じるよりも腕を広げた方が、もっとうまくできるようになるのではないかと、比較するすべを使って、腕を広げている自分と腕を閉じている自分を比べて考える。このようにして、自分の体や用具の動かし方に着目させる。

動きのカルテの例

【かお】	下むき	まっすぐ前	そのた()
【うで】	とじる	ひろげる	そのた()
【ひざ】	曲げない	曲げる	そのた()
【用具】	引く	押す	そのた()

そのほかのこつ

働き掛け2

友達の見付けたこつと自分の動きのカルテの共通点と相違点を整理させる。

「体や用具をこうするとうまくできるようになるのではないかと考えている子どもに、動きのカルテを書いて気付いた動きのこつを問い、発表させる。子どもは、動きのカルテで丸を付けたところやその他で発見した体や用具の動かし方について発表する。そのとき、「どれくらい動かしたのですか」などと、体や用具の動かし方の具体的な姿を問い返す。子どもは、「腕は真っ直ぐではなく、軽く力を抜いて広げた方がよい」などと、動きのカルテの観点よりも詳しく説明する。それを体の模型（関節を動かせる平面模型）を貼った黒板に体や用具の動かし方ごとに分けて板書する。そして、同じ意見の人は挙手するように促し、挙手した人数を板書する。それらの情報を基にして、自分のカルテとの共通点や相違点をワークシートに整理させる。ただ、時間短縮のため、ワークシートには相違点だけを記入させる。このとき子どもは、比較するすべを使って、自分の動きのこつと友達の動きのこつを比べる。そして、相違点に自分の課題があるのではないかと気づき、うまくできるようになるためには、友達のこつをまねしてみようとする。

板書例

動きのコツ

【かお】

【うで】

【ひざ】

【足のいち】

【用具】

【そのた】



働き掛け3

友達からこつを教わったり板書されたのこつを選んだりしながら運動を行わせ、そのこつを評価させる。

「あのこつをまねしてみよう」と考えた子どもに、「いろいろなこつがあるみたいだけど、この中でも大切なこつは何でしょうか」と問い、自分が試している友達のこつを評価させる。この時点で、うまくできる子どももいれば、できない子どもがいることが予想される。できない場合には別の動きのこつを、うまく乗れた友達から教わったり板書してある動きのこつから選んだりしながら運動を行わせ、評価させる。すると子どもは、**関係付けるすべを使って、自分の課題と友達のこつをつなぎ**、「このこつを自分に取り入れれば、もっとうまく動きができるのではないかと」もとうまくできるようになるための見通しをもつ。

「動きのこつを選ぶ→試す→選び直す→試す」というように、繰り返しながらうまくできそうなこつを試し、評価することで、自分の課題に合った動きのこつを見だし、動きを身に付けることができるようになる。

働き掛け4

よりよい動きを身に付けるために大切な動きのコツを問う。

よりよい動きができるようになった子どもに、よりよい動きを身に付けるために大切な動きのこつを問う。すると子どもは、自分の課題を解決できたこつを想起し、ワークシートに記述する。自分の課題と友達のこつをつないで考え、課題を解決することができた子どもは、働き掛け1で記述した動きのカルテとは別のこつに変えたり、こつを増やしたりして、自分の課題に合ったこつを考える。これが、**自分の課題を解決するための動きのこつが分かり、バランスを保つ動きを身に付けることができる子どもの姿**である。

このように、動きを身に付けるまでの過程を振り返らせるからこそ、子どもは別の運動課題に出会ったときにも、自分の課題に合った動きのコツを見だし、よりよい動きを身に付けていけるようになるのである。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定した「考えるすべ」を使って、既存の類似した知識や経験をつなぐことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐ力を高めた姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4において、関係付けるすべを使って、自分の課題と友達の見付けた動きのコツをつなぐことができたかを、ワークシートの記述により判断する。
- ② よりよい動きができるようになったかを、実際の子どもの動きにより判断する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(6月) 「カポカポぽっくりで空中さんぽに出かけよう
～用具を操作する運動遊び・体を移動する運動遊び～」(5時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「グラグラサーフィンで遊ぼう ～体のバランスをとる運動遊び～」(5時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「レスキュー戦隊 35レンジャー ～か試しの運動遊び～」(5時間)